■報告（3）大阪大学

『内陸型地方小都市のコンパクトシティ化による都市再生に関する研究』（研究対象：兵庫県西脇市）

澤木昌典　大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻教授（工学博士）
柴田　祐　大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻助教（工学博士）

司会：第2部は先ず、大阪大学の澤木先生から『内陸型地方小都市のコンパクトシティ化による都市再生に関する研究』についてご報告いただきます。それでは澤木先生、よろしくお願い申し上げます。

澤木教授：

（研究の目的）

兵庫県の西脇市は、神戸市と姫路市の間の加古川市から北にさかのぼった内陸にある小さな都市であり、コンパクトシティに近い土地利用形態を持ちながら、基幹産業の綿織物が衰退し、中心市街地も衰退している。

私はこの西脇市の都市計画マスタープラン策定の委員会等に関係している。私どもの研究室は、環境問題、エネルギー問題というものを考えつつ都市のあり方を考えているが、日本型のコンパクトシティといったものを地方の小都市、つまり都市構造を図式的にとらえやすい所に適用しながら、実際にコンパクトシティという形態をとることによって地域経済に何らかのプラスの効果を与えられないかとか、あるいは住民にとって望ましい生活が展開できる都市に再生できないかといったようなことをこの西脇市で考えてみたいと、今回の研究を企画した。

また、西脇市の主要産業は綿織物であるが、新産業の創出や既存産業の綿織物の高付加価値化にも寄与できれば、この研究のもう一つの地域への波及効果になると考えている。

（西脇市の現状）

西脇市は、東経 135 度と北緯 35 度が交わる所、「日本のへそ」と言われる町であり、面積は全体では 132k㎡、人口は4万4千人程度。綿織物と釣針を主産業とし、第2次産業を中心に発達してきた。市街地は加古川と杉原川とが合流する所に形成されている。

綿織物は江戸時代に農業の副業としてやっていたものが、明治以降の工業化の中でだんだん地元の主要産業になった。産業が盛んになるのに伴って耕地整理をして、そこに市街地をつくってきたため、中心市街地には比較的碁盤目状の道路が通っている。

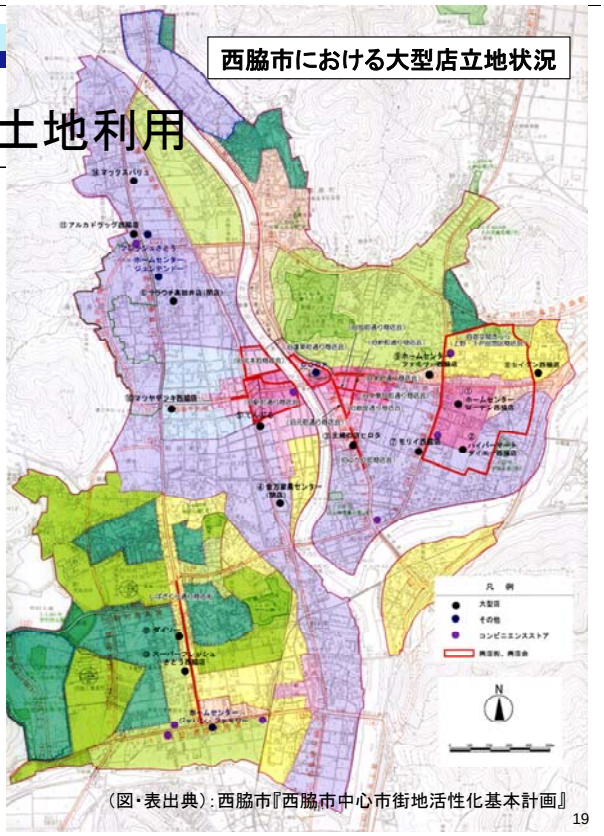
人口・世帯数を見ると、平成 17 年に黒田庄町と合併したが、旧西脇市の人口は昭和 60 年ぐらいをピークに少し減少しており、世帯はほぼ横ばいというような状態である。年齢別人口構成は、平成 17 年国調で 65 歳以上が約 25％であり、高齢化が進んでいる町であると言える。

市全体では商店数・従業者数はそれほど減少していないが、売上自体はかなり落ち込み、ご多分にもれず中心の個人経営の商店はどんどん閉まっていっていて、郊外に大型のショッピングセンターが出店している。かつての主要産業である播州織物は、生産数量も生産金額もほとんど右肩下がりで、織物工場の数も減ってきている。

中心市街地と付近の土地利用

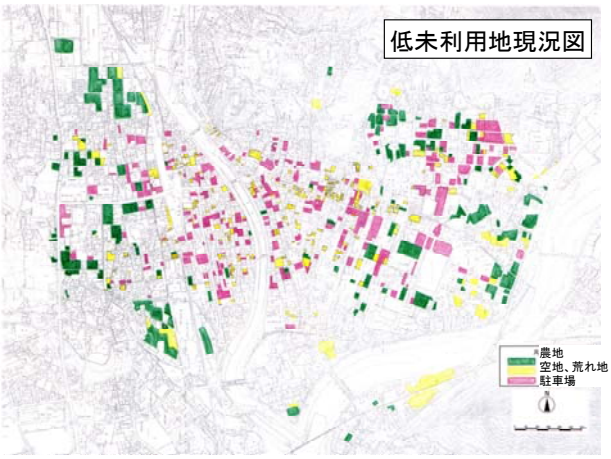
・中心市街地に隣接して大型店が立地
・近年は、西側を南北に走る幹線道路沿いへの出店が目立つ。
・人口１人あたりの大型店の売場面積は0.77㎡で、兵庫県平均の0.45㎡を大きく上回る。

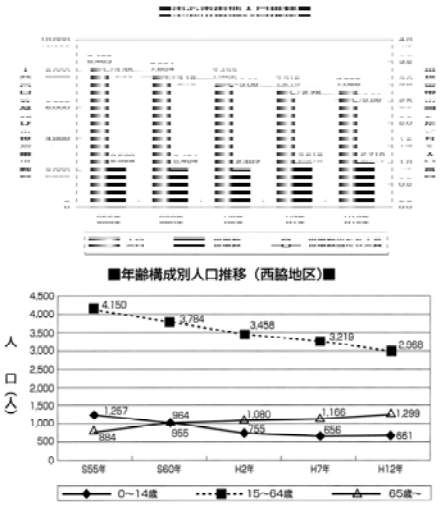
番号	店舗名称	店舗面積（㎡）	開店年月
1	ホームセンターコーナン西脇店	4.247	S51.3
2	ハイパーマートダイエー西脇店	22.795	H5.3
3	主婦の店ヒロタ	1,188	S34.2
4	金万家具センター［閉店］	891	S48.4
5	てんぷる	1,491	S54.11
6	テラウチ高田井店［閉店］	996	H3.8
7	モリイ西脇店	2,881	H5.7
8	セイデン西脇店	1,111	H5.12
9	ホームセンターファミリー西脇店	984	H7.3
10	マツヤデンキ西脇店	830	H9.5
11	アルカドラッグ西脇店	973	H9.6
12	ダイソー	915	H9.12
13	スーパーフレッシュさとう西脇店	980	H11.6
14	マックスバリュ	2,524	H12.6



（図・表出典）：西脇市『西脇市中心市街地活性化基本計画』

中心市街地の衰退

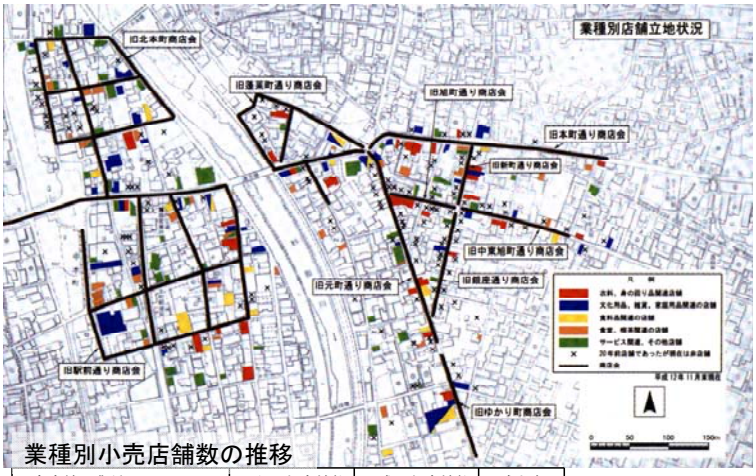




・人口減少
・生産年齢人口の減少
・高齢化の進展
・駐車場や空き地の増加

（図出典）：西脇市『西脇市中心市街地活性化基本計画』

中心市街地の店舗の状況



昭和55年頃の旭町通り商店会

平成12年の旧旭町通り商店会

平成12年の旧本町通り商店会

業種別小売店舗数の推移

小売店舗の業種	昭和54年店舗数	平成12年店舗数	減少率
衣料・身の回り関連	72	31	43.1%
文化用品、雑貨、家庭用品関連	94	46	48.9%
食料品関連	40	19	47.5%
サービス関連、その他	123	60	48.8%
計	329	156	47.4%

・廃業していく商店が多い
（20年間で半減）

（図・写真出典）：
西脇市『西脇市中心市街地活性化基本計画』

中心市街地とその付近の土地利用を見ると、都市計画図ではほとんどが紫色の準工業地域になっている。機織りが盛んになるにつれて、農家の人たちが庭先に工場をつくり、女工さんが住む寮を建てたりしながら発展してきたことから、市街地の中央部にはこのような住・工混在によって形成された部分がある。耕地整理がなされた碁盤目状の町の中に工場が散在している形である。

中心市街地では、高齢化が全市よりも進展しており、土地利用を調べると、空地や荒れ地、駐車場に変わったところが多い。大きな通りに面した所の一部にまだ店舗が残っているが、内側に入るとほとんどがシャッターが閉まったような状態になっている。

少し郊外には、大きなショッピングセンターや、一部で集合住宅の開発、戸建て住宅の開発も見られるが、駐車場になっているところが多い。

（最近の地元での取り組み状況）

西脇市は、この中心市街地を何とかしようということで、平成 12 年度に旧法に基づく中心市街地活性化基本計画を策定して「西脇TMO」（タウン・マネジメント・オーガニゼーション）をつくった。

西脇TMOは、商工会議所が母体になって平成 15 年にできた。中心部にある「西脇情報未来館 21」という地元の綿織物の生地やシャツのオーダーができる店舗の運営と、市に寄贈された「旧・来住家」（きしけ）という地元の大きな庄屋屋敷の運営と、「梅吉亭」（うめきちてい）というレストランをやっている。この3つの施設が、拠点的に集まっており、このあたりが今、西脇の再生の取り組みの中心になっている。

そのほか、播州織工房館という、昔の工場

を使った展示を兼ねたショップがある。8つぐらいのブースを設け、実演・展示販売をしたり、神戸芸術工科大学と連携してファッションショーを開催したりしている。

西脇TMOは町中をまち歩きできるようにいろいろな地域資源を書き込んだマップもつくっている。こういったものももう少し広めていけば観光的な集客ができるのではないかと思う。地元出身の著名人である横尾忠則が描いた場所（Y字路）を訪ね歩くのも面白いと思う。

（研究の進捗状況と今後の方向）

私どもの研究では、まず現状分析として、国勢調査、企業・事業所統計等を用い、細かい地域単位で地域の解析を行う。また、市役所、西脇TMO、中心市街地の西脇区（自治会）の区長さんなどにヒヤリングを行っている。それから、住民アンケート調査を実施して、まさに今、回収している最中である。

そういう中で我々が見出している西脇市の課題は、都市計画マスタープランの作成過程でも指摘されているように、中心市街地を活性化していく必要があることだが、その有する特徴を生かした①「歩いて暮らせる魅力的な定住環境」を整備していくべきではないか、それから②産業活力の増進を目指して、それに対応した土地利用の誘導をしていかなければいけないのではないか、③豊かな自然に囲まれているので、その保全と田園の活用という点からは県の「北はりま田園空間ミュージアム構想」という別の産業振興策とのタイアップも必要ではないかと考えている。

さらに、④現在の公共交通が非常に脆弱であり、バスだけに頼っているところがあるので、その見直しが重要かと考えている。

市では⑤「参画と協働のまちづくり」を進めつつあるが、そこをよりうまく引き出しながら地元主体の都市再生の動きをつくっていく必要があると見ている。

アンケートは、約 3,500 票配布し、居住環境がどのように評価されているのか、将来どういう所に住みたいと思っているのか、日常の生活行動と交通手段はどうなっているのかなどを尋ねている。交通行動については4月以降に過去のパーソントリップ調査のデータを使いながらも解析しようとしている。

それから中心市街地の将来像に関する市や住民の考えを尋ねていく。現状分析やアンケート調査結果を基にして、これからワークショップを組み立てて実施しながら意見を聞いていこうとしている。

地元の人に聞くと、「傘とコートがいらない暮らしをしている」という話が出てきた。ほとんどドアツードアで車で動く。このライフスタイルはコンパクトシティ像としては少し考えにくいので、できるだけ歩いて暮らせるような形の都心の再構成ができないかと考えている。

4月以降は、現在行っている解析を継続し、そのとりまとめをしつつ、さらにパーソントリップ調査等のデータも入手し、定量的な解析もしていきたい。それからそれを踏まえてコンパクトシティ像、あるいはそこに至るシナリオをいくつかつくりながら、定量的なシミュレーションができる項目についてはシミュレーションをして代替案評価をしていく。そういった評価も併せて住民の皆さんに分かりやすくお返ししながら2回ほどワークショップをして、とりまとめていきたいと思っている。最後には、パネルディスカッションという形でワークショップに来ていただいた人たちへも含めて我々の提案を返していこうと考えてい

る。

（将来の土地利用のイメージ）

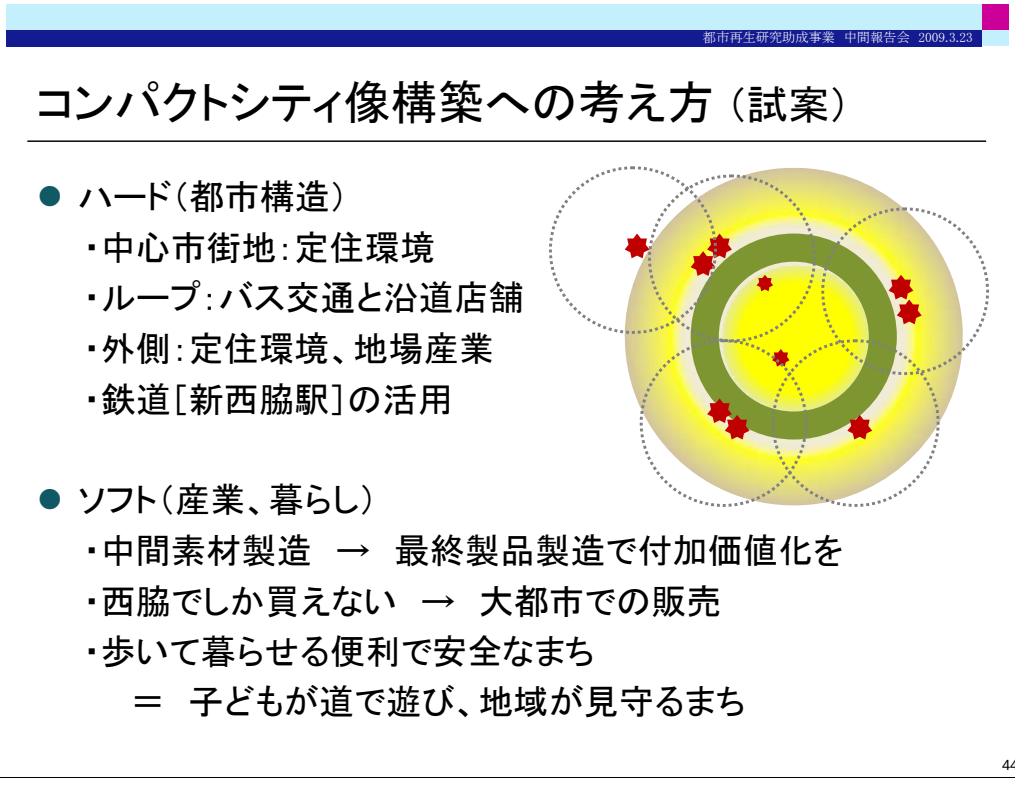
まだ結論は出していない段階だが、私自身が少し考えている将来像、土地利用像は図（「コンパクトシティ像構築への考え方（試案）」）のようなイメージになる。

通常のコンパクトシティの考え方は、中心市街地の商店街を活性化して、中心性を復活しようということになるが、西脇市の現状を見ると、商業を復活するというのはかなり難しい。

それよりも、都市計画マスタープランの案でも述べているが、中心市街地は住宅地としては利便性も高くて申し分のない環境なので、その魅力をもっと高めていくと同時に、幹線道路のループの沿道に商業（図の星印）を配置し、今も公共のバス路線のあるループの交通機能をもう少し強化してループの内側・外側の歩いていける圏内（図の細い○印）で市街地を形成するといった、少し変わった形のコンパクトシティの形成ができないかと考えている。

そのほか、JRの最寄り駅の電車運行の頻度を変えられれば、電車と徒歩でというような形の交通手段を組めるので、そのあたりも考えてみたい。

ソフト面では、綿織物産業は中間素材の製造を中心にやってきているが、デザイン等で付加価値をつけていく方向を目指すなど、どうすれば既存産業が元気になるかを地元の方と一緒になって考えていきたい。



（Q＆A）

伴理事長：今のお話だと、リング状のところを

コンパクトシティの中心にするというイメージになるのでしょうか？

澤木教授：そうですね。既にこの幹線道路沿いに車に依存する店舗が立地しているという構造は大きくは変えられないと思うので、むしろそれを逆手に使い、こういう商業拠点をきちんと結ぶような公共のバスの路線を再編成したらどうか。そうするとお年寄りなどもバスを使って買い物に行く便利さも増す。ほかには現在はコミュニティバスが市域のもっと遠い所とを3路線で結びつつ、中心部の端にある市立病院とカナートという商業拠点に運ぶ形になっているので、これらも整理しながら、中心市街地の居住魅力を上げていけないかと考えています。

伴理事長：今の土地利用そのままにさせて、車に依存しているところを輸送手段のほう、鉄道なりバスなりをこれに合うようにするというような感じですか？

澤木教授：政策的にはそうした変更が大きいが、実際にこういう所にどのような人が住んでくれるのか、既に空き地も多いので、中心市街地への定住促進策みたいなものも併せて考えていきたいと思います。